

廃墟観の変遷にみる退廃文化共存試論

-日英廃墟画の図像解釈学的分析をもとに-

建築学専攻

プロジェクトデザイン研究

序章 はじめに

0-1. 研究背景

廃墟は過去に建築され、機能を失った状態にあるものを指す。磯崎は、「廃墟は未来都市である。」と述べた。この視点を踏まえると、退廃した空間の再解釈から新たな建築場としての思考の促進に繋がるのではないだろうか。成熟社会となった日本は、今後都市が退廃する可能性を抱えていると言える。近年では、膨大な建築資産に対応するための都市計画と地域再生の取り組みが重要視され、廃墟化した空間の再活用や再開発が推進されているが、廃墟の増加傾向はこれらの取り組みを上回る速度で進行している。さらに、再開発により文化資産の喪失や歴史的景観の失われるリスクも高めている。廃墟は、過去の痕跡と現代社会の変化の象徴として、都市の成熟と衰退を映し出す、新たな都市景観の形成要素を持っているのではないだろうか。

0-2. 研究目的

本研究の目的は、廃墟の捉え方の歴史的検証による退廃文化の意義の再考と潜在的価値を再評価するとともに、退廃する廃墟空間を起点とした退廃文化とその人々との共存の可能性を探ることである。

0-3. 研究方法

図像解釈学的アプローチを用いて、廃墟が審美的価値を各地にもたらす起源となった廃墟画、実証的廃墟を映し出す廃墟写真の視覚的資料から読み取れるデータを記述し、背景に潜む要因から図像の解釈を行う。このプロセスを通じて、廃墟観の文化的多層性を明らかにし、人々の廃墟認識を明らかとする。さらに建築作品の図像をもとに廃墟思想を解釈し、人々と文化共存の場として機能する可能性について理論的な枠組みを探る。

0-4. 論文の構成

第1章では、廃墟の退廃文化としての意義への理解を深めるため、廃墟の語源、建築の崩壊/未完、文化と建築の関係性の思考に加え、廃墟論の代表となる先行研究を取り上げ、廃墟概念の理解と総合的な考察を行う。第2章では、廃墟が退廃文化としての表象として認識された経緯を整理し、英日の比較分析より文化として受け入れていった背景の考察を行う。第3章では、文化表象の起源となった廃墟に関する図像解釈学的分析を行う。第4章では、廃墟思想を持つとされる建築家作品の図面やドローイング図像とその反映のされ方について解釈を行う。これらをもとに、廃墟認識の図像とリアルの関係性を明らかとし、建築と退廃文化の新たな役割の位置付けの考察を行う。最終章では、研究の結論を述べ、一連の図像解釈学的分析を通じて明らかとなった退廃文化共存の可能性について述べる。

第1章 廃墟概念と文化的意義

1-1. 用語の定義

本論文では〈廃墟〉を二つのカテゴリーに分類して考察する。第一は〈永続的廃墟 (Permanent Ruins)〉

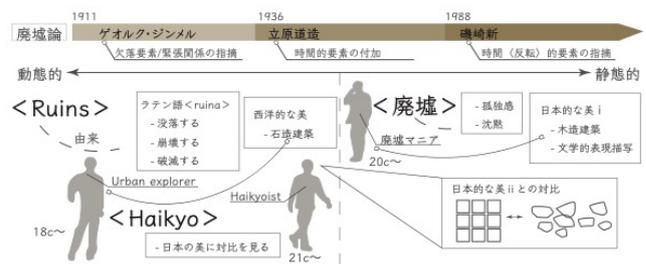
MJ22055 小山東葉

指導教員 山代悟

であり、構造的特徴や機能が修復不可能、または経済的に再生や再利用が現実的ではない建物や施設を指す。第二は〈一時的廃墟 (Temporary Ruins)〉であり、構造的に健全だが一時的に使用されておらず、将来的に修復や再利用が見込まれる建物や施設を指す。また、〈退廃文化〉を健全な気風を損ない負の心象を持つものの、文化として愛でられる表象を持つもの、〈廃墟観〉を廃墟として認識しそこに価値を見出そうとする視点と定義する。

1-2. 廃墟概念の理解

廃墟の語源、廃墟論の先行研究¹⁻³⁾、建築の崩壊や未完に関する言説を取り上げ、廃墟概念の理解に加え、文化と建築の関係性を考察する。まず、廃墟に纏わる言葉には、大きく3種類に分類することができ、各地の認識によって意味合いが異なることがわかる(図1)。その認識の背景には、建築の崩壊という概念が関係することが読み取れ、直面する決定的な契機が存在する。西洋ではルネサンスの終焉や、キリスト教が絶対権力を持っていた時代に生じたローマ劫掠を機に、一方日本では、戦災や自然災害による都市の破壊を象徴し、悲惨さとその後の復興を表現する。



(図1: 廃墟概念の理解)

第2章 廃墟の退廃文化史

2-1. 英国における廃墟文化史

18世紀から廃墟に関する審美的価値が見出されるようになり、アーバンエクスプローラー^{※1)}の出現による廃墟崇拜現象が生じた。ロマン主義と深く関連し、ピクチャレスクの流行、古代都市発掘への興味増大、ヘンリー8世の修道院解散とピューリタン革命による放棄された建築物への注目によって促進され、廃墟は時間の流れと人間のはかなさを象徴し、自然と文明の相互作用を反映する題材として理想化された。またグランドツアーを通して英国人に廃墟の美を実感させ、詩人や画家による作品で社会的関心を集め、風景式庭園としてフォリー(=人工廃墟)まで出現した。19世紀と20世紀には、工業遺産の廃墟が新たな文化的アイデンティティとして現れ、保存や再利用の動きが見られた。21世紀には、廃墟は英国の文化的風景の重要な一部として一般的に認識され、歴史的遺産を超えた文化的資源としての地位を確立している。

2-2. 日本における廃墟文化史

1980年代には、高度経済成長の象徴として廃墟を題材にした絵画作品や写真集により廃墟ブームが生

じ、廃墟マニア^{※2)}が出現した。1990年代のインターネット普及と共に廃墟探索がサブカルチャーとなり、2000年代以降は映画やアニメで破滅後の風景として描かれた。退廃文化における廃墟の美学的価値の再評価、現代文化への影響という側面から理解される。

第3章 廃墟の図像解釈学的分析

3-1. 分析の対象と手法

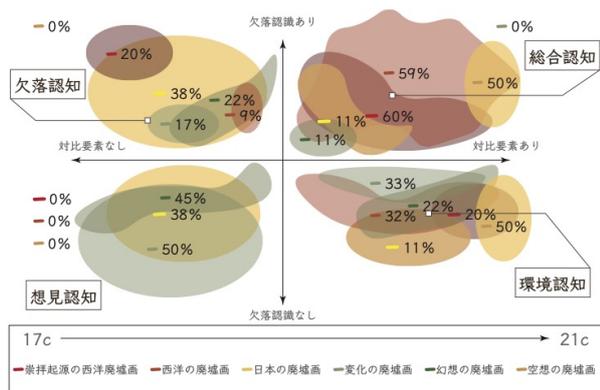
絵画作品においては、西洋と日本における18世紀以降の廃墟画が掲載されている図録⁴⁾に収録されている70点を対象とする。また、実際の廃墟を題材とした写真作品においては、文化として確立された頃⁵⁾に出版され始めた廃墟写真集⁵⁾に収録されている44点を対象とする。視覚的情報の記述を行い、これらをもとに、廃墟史に潜む文化的背景との照合的な図像解釈から人々の廃墟観やその変化の位置付けを行う。

3-2. 図像の記述・解釈

設定した項目に沿って図像の視覚的記述を行い、データシートを作成した。(図2)

(図2: 図像記述データ)

文化表象が確認された18世紀以降においては、時代や地域に関わらず、静態的な廃墟が共通のテーマとして描かれている場合が大半を占めた。図像の廃墟認識の変遷は、4つの事象に分類することが可能である(図3)。



(図3: 絵画の図像解釈)

時代や地域別に参照すると、西洋における崇拝初期は欠落或いは過去の人工物と自然の対比に廃墟観を見出し、次第に廃墟を主題としない廃墟の空気感を漂わせるモチーフ的廃墟に変遷している。対し、日本はブーム初期からそれらの廃墟観が見られ、近年は実在する建築物に対し未来廃墟を空想する描写が現れた。起点が実在郷である西洋と、理想郷である日本は変遷が正反対である。そして、未来を退廃として描

写する背景には、過去の都市災害のトラウマを秘めた将来の現実視が強調されている。これらは、廃墟は単なる破壊の象徴を超えた時代の移り変わりと共に新しい意味を持つ文化的象徴としての役割を果たしていると言える。

第4章 退廃文化共存・試論

4-1. 廃墟思想家による建築作品の図像解釈

つくばセンタービル⁶⁾を対象として、図像記述をし、廃墟思想の反映を図面から解釈する。磯崎は、廃墟観の建築手法として提示したわけではないが、廃墟論¹⁾や設計段階で自身が描いた〈つくばセンタービル廃墟の図〉より、廃墟思想の反映された建築作品としての分析対象に有効であると言える。ここからは、実証的な廃墟観の挿入手法として、主に〈既視性〉・〈統一破壊性〉・〈反転部結合性〉の3要素が確認された。

4-2. 図像とリアル

絵画は人の活動や建築群の中に廃墟が介在する描写、写真は孤独感が際立ち自然界のなかの人工物の小ささを強調する構図がみられた。建築の反映では、一見統一された中に廃墟のモチーフが各ディテールや配置計画に差し込まれ、日本的な語源の規則性に介在する〈廃墟〉、モチーフの描写の廃墟画、すなわち〈想見認知〉に属する廃墟画に近いことがわかる。

終章 結論 21XX年退廃文化共存試論

本研究では、廃墟画、廃墟写真、廃墟思想の反映された建築作品の図像反映に対し、段階的に図像解釈学的分析を行なうことで、廃墟の現代社会での意義と価値を探った。これらを通じて明らかとなった文化認識をもとに、今後の都市探究を踏まえた文化共存を思考できるのではないだろうか。つくばセンタービルは廃墟化を想定した建築物の生成であったが、今後の展望としては、成熟都市を踏まえた更新手法を新築や廃墟の再活用とは別の視点で提示したい。永続的廃墟を、機能を持たせないまま都市のオープンスペースとして介在させ、解釈した3要素と廃墟観との照合より、文化と都市の連続性を創出することが望ましいと考える。

おわりに

現代の日本都市において重要な意義を持つためには、退廃する可能性を内包する成熟都市に達していることを十分に理解し、退廃を受け入れ都市に反映する方法論を思考することが重要であるという姿勢が必要である。本研究を都市探究の視点の手がかりの一つとなることを期待する。

参考・引用文献

- 1) 磯崎新(2013): 磯崎新建築論集=ARATA ISOZAKI WRITING AS ARCHITECTURE 2
- 2) ゲオルクジンメル(1911): 廃墟論
- 3) 立原道造(1936): 方法論
- 4) 渋谷区松濤美術館(2018): 終わりのむこうへ廃墟の美術史
- 5) 呷(2022): 廃墟幻想: エヌディエヌコーポレーション
- 6) 磯崎新アトリエ(2013): 磯崎新のディテール

※注釈

- 1) アーバン・エクスプローラー: 英語圏における廃墟趣味者
- 2) 廃墟マニア: 日本圏における廃墟趣味者